

秋の色種

長唄 全詞章

十世杵屋六左衛門 作曲

別表記「秋色種」

〔本調子〕 秋草の東の野辺の忍ぶ草
忍ぶ昔や古ぶりに

住みつく里は夏苧ひく、麻布の山の谷の戸に、朝夕むかふ月雪の
春告鳥の

あとわけて

艶めく萩が花摺りの、衣かりがね

声をほに、あげて

おろして玉簾

端居の軒の庭籬

うけら紫葛尾花

共寝夜半の萩の葉の

風は吹くとも露をだに、据ゑじとちぎる女郎花

その暁の手枕に、まつ虫の音ぞ

たのしき

変態續粉たり、神なり又神なり、新声婉転す

〔二上り〕 夢は巫山の雲の曲

雪の曙雨の夜に、うつすや袖の蘭奢待

とめつうつしつ

睦言も、いつかしじまの兼ねてより、言葉の真砂敷島の、道のゆくての友車、くるとあくにと

通ふらん

峰の松風岩越す浪に

〔琴の掛合〕 清搔く琴の爪調べ

〔三下り〕 うつし心に花の春

月の秋風

時鳥

雪に

消えせぬ

楽しみは、尽きせじ尽きじ千代八千代

常磐堅磐の松の色

いく十かへりの花にうたはむ